
バカとテストと幼なじみ？

げーま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと幼なじみ？

【Nコード】

N3258BA

【作者名】

げーま

【あらすじ】

超きまぐれな川相蒼馬は明久と幼なじみ？だがバカにあきれてほとんど話さない。Aクラスに試召戦争を仕掛けることによってどう関わっていくのか！

プロローグ

桜が舞っている。今日は文月学園に入学して2回目の春だ。
この学校はとても面白い。試験召喚システムといって科学とオカルトによって開発されたらしい。

AからFクラスまでありAが優秀でFがバカといったところだ。

のんびり桜を見ながら行くとなんともドスのきいた声で

「おはよう。川相。」

と生徒指導の西村先生が言った。

「おはようございます。西村先生。朝からご苦労さまです。」

「そう言うお前もかなり早い時間だな。」

「なんか早く起きてしまいましたから。」

「そうか。ほら、受け取れクラスが書いてある。」

「ほーい。」

「今だから言うが・・・。」

川相 蒼馬 Aクラス

「真面目に振り分け試験を受けるとは思わなかった。」

「・・・ひどいですね。」

「そう思うのも仕方ないだろう。わざと他のクラスを狙うことをほのめかすようなことを言ってたからな。だが本当に真面目にやるつもりはなかったのだろう。」

「ええ・・・。最初の方はそんなに点を取る気無かったんですけど、実際にテスト受けてたら後半ぐらいから調子に乗ってどんどん解いていきましたから。」

「普段から調子に乗ってくれればいいのだが・・・」

「それは無理ですよ。」

「まあ、そうだな。」

「それじゃ、俺もう教室行きますね。」

設定

川相 蒼馬

2－A所属

とことん気まぐれな性格。明久と幼なじみだがバカにあきれてほとんど話さない。一年の時、西村先生の手伝いをして他の先生からも観察処分者よりもいい。と言われている。両親が他界しており親戚に引き取られたが、今は仕送りと少しのバイトで生計を立てている。

久保利光とは一年から知り合い。

得意教科・・・科学、古典

苦手教科・・・世界史、保健体育

中野 龍介

2－A所属

熱血な所がある。蒼馬の中学の時から親友。水泳部に所属しており、工藤愛子とは仲が良い。

友達想いで、人気もある。

得意科目・・・保健体育、物理

苦手科目・・・文系全般

第一話

Aクラスの教室に着いた。高級ホテル（実際に入ったことはないが）のような感じだ。

少しずつ生徒が増え始める時間だ。すると誰かが声をかけてきた。去年同じクラスで仲が良くなった『久保利光』だった。

「やあ、川相君。君もAクラスだったんだね。」

「まあ、やる気はなかったんだけど途中から熱中してしまっ
て。。。」

「君が他のクラスにいて、このクラスに戦争を仕掛けられたらとてもじゃないけどかなわないと思うよ。」

「買いかぶりすぎだろ。」

「そんなことは無いと思うよ。でも一緒にクラスになったんだ。一年間よろしく頼むよ。」

「ああ、そんじゃまた後で。」

その後ぼーっとしていたらあいつが熱血さを含んだ声で俺を呼んだ。
だ。

「あいつ」とは、小学生ぐらいから一緒にクラスになることがほとんどで仲良くなった『中野龍介』だ。

俺は熱血ではないが何故か気があった。

「よう、蒼馬。お前がAクラスだとはな。」

「どういう意味だ。」

「お前のことだから、わざと点を落として他のクラスにしようとしただろう。」

「・・・・・・」

「凶星だな。」

こいつはかなり鋭い。ポーカーフェイスを保つようにしてはいるのだが、やはり長いつきあいなので表情でなく経験談から読んでくるから嘘はなかなか通すことが出来ない。

「まあ、結果的に同じクラスになったんだから、一年間またバカやっつけていこうぜ！」

「バカはやらないぞ。」

「そういうなって。じゃ、チャイム鳴るからあとでな。」

龍介が戻ってから2、3分でチャイムが鳴ったので寝ようかなと思いつつも担任の話を聞いていた。

「皆さん進級おめでとうございます。私は二年Aクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。」

見た目は知的女性の代表みたいな感じだ。

話を軽く聞いていると、

「クラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください。」

「・・・はい。」

彼女は物静かな雰囲気を持っていた。そしてクラス全員の視線が集まる。

「クラス代表」 Ⅱ 「学年主席」ということだ。注目を浴びるのは当然だ。

「・・・霧島翔子です。よろしくお願いします。」

彼女は一年の時から有名であり、男子生徒からの告白が絶えなかった。しかし、一人も心を動かすことはなかった。

そのことから、彼女は同性愛者ではないのかという噂が流れたが、俺はあまり信じてない。

そんなことを考えていると、

「Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように。」

高橋先生の結びの言葉が告げられ、霧島さんが会釈をして席に戻る。

（最初の試召戦争はどこがするかなあ）

そんなことを思いながらぼーっとする。

第一話（後書き）

はつきりいって自分ではなかなかいい文が書けないと思います。
アドバイスなどは是非よろしくお願いします。

第二話

ぼーっとしていると龍介が少し慌ててこっちに来た。

「おい！蒼馬。ニュースだぜ。なんとFクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けて来やがった。」

「初日からか……。でもEじゃなくてDってことはよっぽど勝つ自信があるんだろうな。」

「うー。俺も試召戦争してー。」

「めんどくさいだろう。補充試験とか特にやりたくない。」

「でも、点数補充しないと鬼の補習だぜ。」

「まだその方が俺はマシだよ。」

「テストより補習の方がいいなんて変わってるな。俺は補習絶対イヤだぜ。」

すると一人の女子が話しに入ってきた。

「テストより補習が良いってかわってるね。」

話しに入ってきたのは『工藤愛子』だ。一年の終わり頃に転入してきたらしい。

「まあ、こいつが変わっているのは分かっている話なんだがな。」

「でも、補習がいいってというのは特に変わっていると思うよ。ボクは補習はイヤだな。」

「俺は、変わってて良いんだよ。」

「それより、FがDに仕掛けたのは気になるよな。」

「そうだね。Eに仕掛けたんだから自信があるのかもね。」

「勝つ自信があるってことは、何らかの理由でFクラスになったんだろう。ここが巻き込まれなければどっちでもいいよ。」

「蒼馬、もっと興味持てよ。」

ちなみに工藤と知り合いなのは龍介が水泳部なのでそこで知り合って、俺とも知り合ってたところだ。

「暇だし見に行ってみようかな。」

「なに言ってんだ蒼馬。戦争中は自習だぞ。」

「自習だから、試召戦争の見学という自習だ。」

「それはちょっとムリがあるんじゃないかな・・・。」

「ま、仕方ないか。」

そこで解散し、それぞれの席に戻り自習することにした。

ああ見えて龍介はちゃんと勉強するから、文武両道ってところだ。ちなみに俺は帰宅部だ。時々西村先生の手伝いをしているが。

しばらくして昼休みになり、龍介が

「飯どこで食う？」

「教室でいいだろ。」

「お前、今日購買か。」

「ああ、そうだ久保。一緒に買いに行こうぜ。」

「ああ、ご一緒させて貰うよ。」

「んじゃ、先に食べ始めといてくれ。」

「ああ、じゃ工藤。一緒に食おうぜ。」

「いいよ。」

購買に向かっていると、

「あれ、明久がいるってことはFクラスだな。」

「明久って、観察処分者の吉井君だよな。」

「ああ、最近は話してないけど、幼なじみだからな。ん？あれって姫路瑞希じゃないか？」

「姫路さんというと、次席候補の一人だね。Aクラスにいないと思ったらFクラスだったのか。」

「これだろ、EじゃなくてDに仕掛けた訳は。」

「そうだろうね。」

「これだと、Aも少し危ないかもな。」

「どうしてだい。」

「あの赤いたてがみのヤツは坂本雄二といって悪鬼刹羅といって結構有名な不良だが、『神童』と呼ばれていたんだ。元神童とはいえ油断は出来ない。」

「なるほどね。」

「ま、さっさとパン買って戻るか。」

「そうだね。」

第三話

パンを買って教室に戻り、龍介達のところに行くと、工藤以外に女子が2人増えていた。

「おお、戻ってきたな。この2人は『木下優子』と『佐藤美穂』だ。」

「よろしくね。」「ご一緒させて貰っています。」

「じゃ、俺だな。俺は川相蒼馬。で、こっちが久保利光。よろしくな。」

「よろしく。」

「んじゃ、2人ともすわれよ。」

「「ああ。」」

食べ始めてからさっきのことを皆に話した。

「へえ、Fクラスに姫路さんが。」

「たしかにそれだとちよっとうちも危ないかもな。」

「でも、強いのは姫路さんだけだね。ボクたちが負けることはないんじゃないかな。」

「でも、元神童がいるんだ策を練ることもできるし、観察処分者

がいる。」

「観察処分者って要は、バカな人ってことですよ。」

「それでも油断は禁物だ。先生の雑用を召喚獣で手伝っていることから操作がずば抜けてうまいと思う。」

「めんどくさいから。仕掛けてきたら、罠に気をつけてどんどん倒していったら良いんじゃないか。」

「まあ、僕はそういうことでいいとおもうよ。」

食べた後、試召戦争なのでここでも自習と言うことになる。俺は寝ている。
すると、

「あ、戦争が終わったみたいだね。」

「やっぱFが勝ったか。」

「次はどこに仕掛けるんだろうな。」

「さしずめBってところじゃないか。」

「どうしてだ、蒼馬。」

「Dの横がBだから。」

「でもそれだけじゃ、理由にらないと思うんだけど。」

「いや、十分な理由だろ。Fは弱いんだから、押し込まないと意味がない。」

「なるほどね。じゃバイバイ川相君。ボクは中野君と帰るから。」

「ああ、じゃな龍介、工藤。」

「そうじゃ。俺も帰るか。」

まったり帰っていると明久がどんよりしながら、帰っていた。何となく気になったので久しぶりに声をかけてみた。

「おい、明久なにテンション下がってんだ。」

「あ、蒼馬久しぶりだね。」

「Dクラスに勝利おめでとう。お前は何か活躍したのか。」

「僕がFってわかってるんだね。」

「まあ、明久だからな。」

「それ、ちょっとひどくない。」

「気にするな。」

「それより蒼馬は、どこのクラスなの。」

「秘密だ。一個ヒントを与えておこう。一度そのクラスを見て俺が居なくてもそのクラスの可能性はあるからな。」

「ええー。それってヒントじゃないじゃん。」

「そんなことないだろ。消去法が使えなくなったただけだ。」

「それって難しくしてるよね。」

「よく気づいたな。」

「それぐらいわかるよ。」

「そうか。で、なんで落ち込んでんだ。」

「う、秘密だよ。」

「ま、どっちでもいいがな。んじゃ俺こっちだから、また明日。」

「うん、じゃあね。」

第四話（前書き）

第四話

俺が住んでいるのは、家賃の安いちょっとボロいアパートだ。高校入学までは親戚の家に住んでいたんだが、一人暮らしをした方がいいんじゃないかと思い、頼んでみたところ快く了承してくれた。今の生活費はバイトと仕送りでなんとかなっている。

飯をすまし、風呂も入った後パソコンのメールチェックをしてから、布団に入り夢の中に入っていた。

次の日、文月学園へのんびり行って自分の席に座ると龍介が声をかけてきた。

「なあ、昨日さあ、FがDに戦争仕掛けて勝ったじゃん。でも、設備交換しなかったらしいぜ。」

「じゃあ、本格的にAも危ないんじゃないか。」

「そうか？」

「ああ。次はCかBじゃないか。でもBの代表はあの根本だし、Cはその彼女の小山だったと思う。」

「へえー。じゃあどっちに仕掛けてもあの根本が関わってくるんだろうな。」

「俺ははっきり言ってどっちでもいい。」

「本音は単に試召戦争やりたくないだけだろ。」

「よくわかってるじゃないか。」

そんな会話をした後、H Rが始まり一時間目となった。

昼休みになり、龍介話しかけてきた。

「昼飯どうする？ ああ、Fは今度Bに仕掛けたそうだ。」

「じゃあ、あの根本とやるのか。こりゃ本格的に来そうだな。」

「よっしゃ。試召戦争ができるぜ。」

「俺はやりたくねえな。」

そんな話をしながら昼飯を終え、五時間目が始まったところで、

『Fクラスを倒せー。』

『バカクラスなんかに負けるかー』

という声が聞こえてきた。すると龍介が、

「始まったな。」

「見学でも行くか？」

「行っているのか？」

「知らん。」

「おいおい。」

「それでも俺は行ってくるぜ！」

「あ。おい。これだから気まぐれは・・・。」

俺はこっそりFとBの勝負を観戦していた。

「あ。明久だ。」

明久がいた。そしてこんなことを言っていた。

『Bクラスの根本君には彼女がいる。』

すると覆面を被った集団が、

『なに～～～』

さらに明久が言った。

『相手はあのCクラスの小山さんだ！』

『な～～～』

そして最後に、

『何と、毎日手作りのお弁当を貰っているらしい!!』

『ゆるゝさゝん』

おぞましい集団となっていた。

『お前らに独り身のつらさが分かるか』

なんとも言えない感じだった・・・。

Aクラスに帰った後あれはなんだったのか龍介に聞いた。

「ああ、あれは異端審問会『FFF団』だ。」

「何なんだそれは。」

俺はあきれ気味に聞いてみる。

「簡単に言えば『リア充死ね』だ。」

「なるほど。変な集団だな・・・。」

第五話

次の日の朝、登校してから久保と龍介と話していると、

ガラッ

「我々CクラスはAクラスに9時から、試召戦争を仕掛けます！
木下優子。絶対に許さないんだから。」

さっさと帰っていった。

「なんだなんだ。木下がどうとか言ってたぞ。」

「木下。なにしたんだ。」

「な、なにもしてないわよ。Cクラスの人とも話したこと無いの
に。」

「じゃあどうなっているんだ。」

すると、代表が木下に話しかけてきた。

「優子。どういうこと。」

「それが、何が何だか。」

「どうせ、あんたの弟が作戦のためにやったんだろう。弟の方は
あんたにそっくりだし、演劇部のホープなんだろ。」

「あのバカ！」

「まあ、取りあえずは落ち着いてちゃんと作戦を立てないと。」

「・・・川相の言うとおり。」

そこで龍介が、

「どうする。力で押していくか？」

「それをベースにせめていいいだろ。そして人員はなるべく少数の方が良い、FとBがやってどっちが勝っても攻めてくるだろうからな。」

「・・・二人の作戦を使わして貰う。」

「それじゃ、木下のことは後回しにして今は、試召戦争に集中しようぜ。」

「そういうことでいいな。」

「ええ。」 「うん。」

そういうことでCクラスとの試召戦争が始まることになった。

第六話

A対Cの試召戦争が始まった。俺は後ろの方で倒し損ねた人を倒す役割だ。前の方にいるよりは戦う回数が少なくて良いと思う。

すると、早くも一人来た。

「俺は彼に数学で試召戦争を仕掛けます！」

「承認。」

「くっ！」

Aクラス 川相蒼馬 数学 297点

Cクラス 今宮純 数学 104点

俺の召喚獣が召喚される。

俺の姿がデフォルメされたような顔に『見た目は子ども頭脳は大人』の怪盗のような服だ。

武器はナイフ、ストックは10本ほど、そして単発式の銃が腰に装備されている。

俺は、攻撃を直接喰らわないようにある程度距離を取って、銃で攻撃する。

相手は操作に慣れていないのですぐに当たった。そしてバランスを崩したのでナイフを逆手に持ってトドメを刺した。

そのあとも、何人か来たがほとんどダメージを受けずに倒すことが出来た。

俺がいた廊下には人がほとんどいなくなったので、Cの教室に入ると丁度代表にトドメをさすところだった。

「くっ。Aクラスだからってうちをバカにして。」

「小山さん。私はCクラスに来たのは初めてよ。」

「たぶん来たのは私の弟じゃないかしら。」

「そんな・・・。」

ここでC対Aの試召戦争は終わった。

第七話

A対Cが終わった後、F対Bも終わったようでFが勝った。

そして汚物が来た。汚物が来たという表現はおかしいかもしれないが本当なのだ。よく見たくもないが女装した根本だった。ありえない。あんなものを見てしまうだなんて。

ちなみに話の内容は、試召戦争を仕掛ける準備をしているのと。と。なんで言いに来る必要があるんだ？

そして次の日。なんとFクラスが来た。話しによると一騎打ちを申し込んできた。面白そうなのでよく聞くことにした。

「あれ？蒼馬Aクラスだったの。」

「そうだが。」

「明久。知り合いか。」

「うん。幼なじみだけど。」

「いや。最近はお前のバカにあきれていたんだがな。」

「ひどいよ。」

「まあ、交渉を続けようじゃないか。」

「何で川相君が仕切っているのよ。」

「いいじゃん。それより変わって貰って良いかな。」

「いいけど、おかしいことはしないでよ。」

「分かってる。クラスに関係することだからな。じゃ、交渉を続けよう。Aクラスの川相蒼馬だ。」

「俺はFクラスの坂本雄二だ。」

「さて、一騎打ちをお望みのようだけど、どうしてかな。」

「そりゃ、早く終わるから良いだろ。」

「でも罠の可能性が大きすぎるからな。」

「Cとの戦争はどうだった。Bも準備が出来てると言ってきたんだろ。」

「おっと、脅しか。そうだな……。じゃあ、七対七はどうかかな。」

「それじゃあ、ちょっと長くないか？」

「そうか、たしかにね。・・・じゃあ、五対五ならいいかい。」

「ああ、それならいいぜ。」

「じゃあ、五対五で科目の選択権は一、三、五はそっちで後はこっちでいいかな。」

「ああ、じゃあ開戦は9時からで良いか。」

「代表。問題ないか。」

「・・・いい。そして、負けた方は勝った方の言うことを聞く。」

「いいだろう。」

「ちよつと雄二。まだ姫路さんがいいっていいじゃないか。」

」

「「だまれ明久。」」

「それじゃ、そういうことで。」

そうして交渉は終わり、誰がでるか決めることにした。

「どうする？五戦目は代表が出るとして、私は最初をすればいいのかしら。」

「そういういことで。たぶんむこうには、勝てる自信があるのは三人のようだ。」

「どうしてわかるんだ。」

「まず、姫路瑞希は勝てるひとりとして次に、あの坂本代表、そして『ムツツリーニ』がいた。」

「えっ、まじかよ。」

「ムツツリーニというと、たしかムツツリ紹介というのを聞いたことがあるがその経営者かい。川相君。」

「ああ、保体だけはずば抜けて点数が高い。」

「え、じゃあボクそのこと戦ってみたいな。」

「じゃあ、三戦目を取ったら良いだろう。で、四戦目は俺が貰おう。」

「誰が出てくると予想してるんだい。」

「多分姫路瑞希だろう。二か四にしか出ないと思う。科目を設定しなくても十分通用するからな。」

「でも、君は姫路さんに勝つ自信はあるのかい。」

「いや、まあ三割ぐらいだ。でも一と二を取れば十分なプレッシャーになるからな。」

「じゃあ二は誰にするの?」

「佐藤か龍介にやってほしい。」

「俺は今回譲るぜ。」

「じゃあ佐藤でいいか。」

「ええ。」

「じゃあそういうことで頑張ろうぜ。」

「ええ」「」「うん」「」

第七話（後書き）

長くなりました。ちなみに蒼馬は楽しい事を見つけて集中すると口調が変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3258ba/>

バカとテストと幼なじみ？

2012年1月13日15時54分発行